



公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団

URAKAMI FOUNDATION

財団
ニュース
2023

2023年1月発行

CONTENTS



- 理事長挨拶
- 学術研究助成事業
- ・近年助成した研究から
ご紹介



● 食文化の振興・啓発活動

- ・令和3年度東日本大震災復興支援事業
- ・活動紹介 網地島ふるさと楽好
- ・浦上ランチプロジェクト(ラオスにおける学校給食プロジェクト)
- ・こども食堂支援助成事業
- ・読売写真ニュースを学校に寄贈／フードピア金沢を支援



- 浦上アワード
- 広報活動
- ・研究報告書の発行
- ・財団ニュースの発行
- ・編集後記

理事長挨拶

昨年より理事長を引き継ぎました浦上聖子でございます。

浦上財団の40周年を目前にひかえ、その歴史の重さと軌跡を感じながら身の引き締まる思いで努めさせて頂いております。

コロナ禍も4年目になり、ウイズコロナのフェーズに入り世の中も次第に日常を取り戻してまいりました。財団もやっと本来の活動形態に戻りつつあり、昨年は助成対象者の皆様方と懇親の場を持てたことも、大変勉強になりました。

令和4年度は、学術研究助成に於いては20件、計6千4百万円を超える助成をいたしました。設立当初は助成件数5件、1千6百万円余でしたが37年間で大きな飛躍を遂げ、食の研究に携わる皆様方のお手伝いができますことに財団の大きな意義を感じております。東日本大震災復興支援も11年がすぎ、復旧から復興、そして町おこしへと進化していると感じます。また、昨年8月には、ラオス学校給食支援事業が、外務大臣より表彰を受けるという栄誉に預かりました。2012年からの継続の賜物と

して大変喜ばしく、また、同時にラオス支援は長く続けていかねばと再確認したところでございます。12月に開催された国際栄養学会に於いては、「浦上トラベルアワード」として若い研究者に研究発表の為の旅費を援助致しました。世界各国から「栄養」を考える研究者たちの集いに参加させて頂き、あらためて「食」には国境がなくグローバルなのだと感じ、良い刺激を頂きました。浦上財団も学術研究助成という大きな柱を大切に育てながら日本国内のみならず、アジアに、世界に目を向けて活動の場を広げていければ、と大きな目標を持っています。「食」はこれからますます個々の生活、健康にはもちろん、地球環境にも大きな影響を及ぼしていくことを考えると、その発展と研究に寄与できることに大きな責任を感じております。これからも様々な方面に目を向けて活動の幅を広げていきたいと考えております。

日頃より財団の活動にご理解とご支援をいただいている皆様方に心より御礼を申し上げますとともに今後ともお支えいただきますようよろしくお願い申し上げます。



研究助成贈呈式で挨拶する浦上聖子理事長



主な活動紹介

学術研究助成事業

学術研究助成事業は財団設立以来の当財団のメインとなる事業活動の一つです。1研究テーマ当たり330万円を限度とする助成金は各種の「食」に関する研究助成の中でも比較的高額となっているのは、財団設立当時の選考委員の皆様からの助言により、幅広い研究に対して少額で支援するより、厳選したテーマに対してまとまった額で助成した方が、より効果的な研究が可能とのアドバイスを受けてのことです。

応募に当たっては、毎年ホームページや研究機関へのはがき等で広く応募を募り、昨年は6月1日から7月10日の申請期間に149件の応募があり、9月上旬、学識経験者で構成される選考委員会において、今後の食品産業にとって重要な分野の研究や若手研究

者の育成という視点に立ち、厳正な審査を経て20名の研究者への助成を決定しました。

贈呈式は10月22日にホテルニューオータニにて久しぶりに関係者が一堂に会して行うことができました。冒頭、浦上聖子理事長から「浦上財団の学術研究助成は、設立当初から、地方、若手、女性研究者に重点を置く方針で選定してきました。今回も北は北海道大学、南は長崎県立大学など全国より選定しました。皆様のご活躍を大いに期待しています。」との挨拶に続き、三木選考委員より選考経過の説明と研究者への激励がありました。その後、各研究者の皆様から研究の内容の説明がありました。

財団設立以来37年間の助成件数はのべ478件、助成金の総額は13億2千万円を上回る実績となり

ました。助成した研究成果は、毎年浦上財団研究報告書としてまとめられ、これまで第29号まで発行され、今年度は3月に第30号を発行いたします。本活動を通じて、いささかでもわが国の食品産業及び食文化の発展と国民の食生活の向上・安定に寄与したいと念願しております。



浦上聖子理事長より贈呈書を受け取る研究者



集合写真

～近年助成した研究からご紹介～

当財団が助成している研究の多くは学術的・専門的ですが、「食」は私たちの日常にも大きくかかわってきます。そこで2022年3月発行の浦上財团研究報告書Vol.29掲載の研究報告より2名の先生に研究の成果を解りやすく書き下ろしていただきました。

令和元(2019)年度助成

「食品の機能を有効活用して 生活習慣病を予防する」

東京農工大学大学院 農学研究院 好田 正



健康長寿は世界中の人々の共通の願いです。しかしながら、長く生きるとそれに伴って癌、糖尿病、脳・心血管障害などのいわゆる生活習慣病の患者も増えてしまうので、単なる長寿ではなく健康で長生きすることが人々の幸せにつながる重要な課題です。

では、なぜ長生きをすると生活習慣病になりやすくなるのでしょうか？近年、多くの研究によって慢性炎症が生活習慣病の引き金や悪化の一因であることがわかってきました。私たちは日々の生活の中で、体内や外界から様々な刺激を受けています。それらの刺激によって一部の細胞が活性化されると炎症が引き起こされます。感染症やケガなどの際に起こる急性炎症と異なり、日常の微弱な刺激によって引き起こされる炎症を慢性炎症と呼びます。慢性炎症は急性炎症と異なり熱などの自覚症状はありませんが、長期にわたって持続することによって周辺の細胞や組織にダメージを与えて、そのダメージが蓄積することで組織や器官の機能が低下し、結果として生活習慣病の発症や悪化につながることが示唆されています。一般的に生活習慣病の原因であると考えられている肥満は、蓄積した脂肪細胞が産生する物質が刺激となって慢性炎症が引き起こされることによって生活習慣病につながっていると考えられます。

そこで私たちは、慢性炎症を抑制する機能を持った食品を探し、それらを日々の食事に積極的に取り入れることで、生活習慣病の発症を予防することを目指しています。

当財団からの研究助成により、カレーなどに用いられるウコンに豊富に含まれているクルクミンを動脈硬化のモデルマウスに与えると動脈硬化の発症が抑制される傾向を確認することができました。この結果は、毎日の食事の質を工夫することで他の生活習慣を大きく変えなくても生活習慣病の発症リスクを下げることが可能であることを示しています。

今後は同様な機能を持った食品をさらにたくさん見つけていくとともに、各食品の相乗効果も検討して、より有効で利用しやすい食事を提案していくたいと思っています。

研究助成をいただきました浦上食品・食文化振興財団に心より感謝申し上げます。

令和元(2019)年度助成

「乳酸菌由来新奇抗菌ペプチド・抗菌タンパク質の探索と構造・機能の解析」

九州大学大学院 農学研究院 善藤 威史



食品の保存には様々な保存料が用いられていますが、健康への影響が懸念されるものもあり、生物由来の天然の保存料の利用に大きな期待が寄せられています。一方で、乳酸菌は我々の健康によい効果をもたらすだけでなく、生産する乳酸によって発酵食品の保存性を高めていることが知られています。さらに乳酸菌の中には、バクテリオシンと呼ばれる抗菌ペプチドもしくはタンパク質を作るものも存在し、バクテリオシンは乳酸とともに食中毒菌や腐敗菌の増殖を抑制することで食品の保存性向上に寄与していると考えられています。乳酸菌バクテリオシンは体内や環境において分解されやすく、人体や環境に優しく安心して使用できる抗菌物質として注目され、最も代表的な乳酸菌バクテリオシンであるナイシンは食品保存料として世界中で広く利用されています。また、乳酸菌バクテリオシンは、食品と同様に高い安全性が求められる用途への利用も期待され、実際にナイシンは、誤飲しても安全な歯磨き粉などにも応用されています。そこで我々は、様々な用途への利用を目指し、種々の分離源から得られる乳酸菌から、優れた特性をもつバクテリオシンを探索し、それらの構造や特性について研究を行っています。

乳酸菌は、発酵食品だけでなく、様々な環境から分離することができ、その中からバクテリオシン様の抗菌活性を示す乳酸菌を探索します。乳酸菌培養液に分泌される抗菌物質を解析し、ナイシンのように種々の細菌に対して広く抗菌活性を示すものから、ある特定の菌種のみに対して抗菌活性を示すものまで、これまでに様々なバクテリオシンが見出すことができました。さらに、抗菌活性の違いによって、その構造も多種多様であることが明らかになってきています。一般的な抗菌物質は有用菌にも作用してしまう場合が多いのですが、こうした乳酸菌バクテリオシンを適材適所に使い分けることで、有害菌のみを選択的に抑えることも可能になると考えています。

研究助成をいただきました浦上食品・食文化振興財団に心より感謝申し上げます。



■ 浦上ランチプロジェクト(ラオスにおける学校給食プロジェクト)

ラオスはインドシナ半島の内陸に位置する多民族国家で、東南アジアの中でも貧しい国の一であり、2009年の調査では、ラオスの食糧事情が危機的な状況にあると国際連合や国連WFPから報告され、子どもの約50%が深刻な栄養不足に陥っていることも明らかになりました。

そのような中、2010年に浦上節子理事長(当時)が初めてラオス中西部を訪問し、メコン川を隔てただけの決して豊かでないタイ東北部と比べてもラオスの貧困状況に驚いたとのことです。しかし現地の小学校を訪れた際、子供たちは各自手作りの花束を用意して理事長を歓迎してくれ、古びた服装と裸足の子供たちが多いにもかかわらずとても礼儀正しく、その目は皆純粋で好奇心に輝いていたことにとても感激したそうです。

学校に給食は無く、生徒は昼食のため一度家に戻ると、午後は家の農作業の手伝いなどで午後の授業は受けられなかったり、結果として進級試験を通ることができなかつたりする子供たちも多くまた、食事内容もご飯が中心でタンパク質や野菜などの副菜の意識が大人たちの中にも低いことに心を痛めるとともに、理事長が幼少期をすごした戦後すぐのころの日本を思い出し、これからラオスの発展を担う子ども達を健康に育てる助けの何かができるのかとの想いが2012年にスタートした浦上ランチプロジェクトにつながりました。

お金だけで状況を打破するのではなく村人や子供たち自身に問題を解決する力を付けてほしいとの考え方から、浦上ランチプロジェクトでは村人たちが学校

の敷地内に菜園を作り野菜を育て、また魚の養殖や鶏を育てたりして給食のおかずの材料を作ります。給食で提供するのは野菜やお肉、魚が入ったスープでご飯は持参します。こども達や教師が菜園や養殖池の管理をしつつ、村人たちも給食の調理や菜園の管理などをします。事前の意識調査で、村人たち皆が協力体制を築ける村の小学校をモデル校として選び、事業をスタートさせました。

ランチプロジェクト開始から10年経過した現在では、浦上財団からの援助を卒業して給食ができるまでに自立した学校が1校あり、現在では7校目の小学校に支援を開始しています。この10年でラオス国政府が子どもの教育に力を入れ、今では家の農作業のために学校に行けないような子供はいなくなりましたが、政府も給食の重要性は理解しているものの、やはり全学校での給食というところまではなかなか実現できていません。

10年前は食事の前の手洗いといった衛生観念も希薄だった生徒が今では当然のように手を洗います。「栄養のバランス」という概念が親たち・子どもたちにも培われてきました。また学校の敷地内に魚の養殖用の池を造り、養殖した魚を給食の食材として利用しているほか、校内に造った畑では野菜を収穫するなど、

ラオスという国の実情に応じた自給自足的な学校給食事業(浦上ランチプロジェクト)も着実に進み、このことが日本とラオスの相互理解の促進に寄与したことでのことで、昨年8月には外務大臣表彰を授与されるまでとなりました。



写真提供：外務省

○こども食堂支援助成事業○

近年、日本でも困難な状況、孤立した状況に苦しむ子ども達が増えています。2022年の調査で全国に7,331カ所のこども食堂があり、おなかをすかせた子ども等への食事の提供から個食の解消、滋味豊かな食材による食育・衛生教育、地域の交流の場づくりと様々なアプローチで子ども達を支援しています。

浦上財団も令和3(2021)年度より、特に困難な状況に陥りやすいひとり親家庭の支援を開始することとし、NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえが行う「ひとり親支援コース」(特にひとり親家庭支援に中軸を置いたこども食堂・フードパントリー・宅食等の支援活動)に年間500万円の指定寄付を行いました。特に現在はコロナ禍で弱い立場にあるひとり親家庭はより一層困窮している家庭

が増えていると聞いており、必要な方々に支援が迅速に届くことを願ってこの支援は今後も継続して行います。



国際栄養学会議「浦上アワード」

国際栄養学会議は、4年に一度開催される世界的な栄養学関連の最大の会議であり、前回の日本開催は1975年に第10回国際会議を京都国際会議場で開催いたしました。第22回国際栄養学会議も当初は、令和3年9月の予定で準備しておりましたが、新型コロナウイルス感染症の流行拡大を受け、令和4年12月6日～11日に延期されました。

主催する第22回国際栄養学会議組織委員会の求めに応じ、世界中から参加いただく若手研究者に対して、日本への渡航費等の一部を負担するための「浦上アワード」として20名の若手研究者へ600万円の助成をいたしました。



食文化の振興・啓発活動

読売写真ニュースを学校に寄贈

浦上財団のロゴともなっている『食』は「人」に「良」いこと元気のもと』をパネルに用い、「食育活動」に熱心に取り組んでいる全国49ヶ所の小学校、中学校、高校、図書館に教材資料として毎週写真ニュースを提供しています。提供先の小学校等の児童生徒たちからの関心も高く、写真ニュースは学校教育にも有効であるとのことから、引き続き提供願いたいとの要望が寄せられています。

- ・児童が一番多く通る廊下の壁に掲示しています。登校時や休み時間には複数の児童が写真ニュースを見ている姿を目にします。
- ・掲示委員会の子たちを中心に掲示してもらっており、多くの児童が足を止めて見ている様子があります。
- ・ニュースを簡潔にまとめており、児童が新聞づくりなどの学習を行うときに、見出しのつけ方や記事を作る際に参考となっています。
- ・子どもたちに新聞や文字に触れる機会がより大切だと考えています。
- ・児童の興味や知識等を広げることができ大変感謝しております。
- ・ニュースの記事を話題に、全校集会や学年での話に活用しています。



フードピア金沢を支援

独自の食文化と石川県の冬の日本海の海の幸・加賀野菜を紹介する食のイベント「フードピア金沢」は毎年2月に金沢市及びその周辺地域で開催され、当財団は第1回(1985年)より継続して支援しています。

第37回目となった昨年も、金澤老舗百年会員のお店で食事と講師による金沢文化の話を堪能する「金澤老舗よもやま話」、金澤町家食めぐり、デパートや金沢の有名なホテルを会場とした冬の金沢の味を楽しめるイベントは2月1日から28日まで開催され、各地より多くの参加者で盛り上がりました。

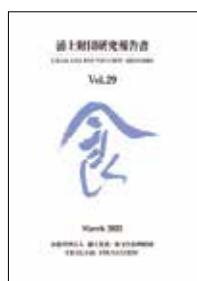
フードピア金沢も30年を超える歴史の中で時代の流れに合わせ様々な変遷を遂げていますが、食をはじめ、金澤芸妓、老舗、金澤町家といった金澤ならでの地域資源、文化を活用した催しを実施しながら金沢の冬を代表するイベントとして定着しています。

広報活動

研究報告書の発行

助成した研究のうち一昨年秋までに報告をいただいた研究結果をはじめ論文発表が終わり公表可能となった研究結果11件を浦上財団研究報告書Vol.29として取りまとめ、昨年3月に発行し、全国の研究機関附属図書館や都道府県立図書館にお送りしました。

また、昨年秋までに当財団に提出された研究報告を収めた研究報告書はVol.30として今年3月に発行する予定です。



財団HPのリニューアル、財団ニュースの発行・財団リーフレットの配布

研究助成事業や復興支援事業の告知、申請や結果発表をはじめ、当財団の活動をHPにてお知らせをしています。また、研究助成事業と震災復興支援の申請をオンライン申請にし、日々の助成対象者との連絡の利便性を高めるため、各助成者とはマイページでのやり取りを行っています。

ほかにも財団の事業活動などを紹介するため写真を多く掲載した財団ニュースを毎年1月に発行しております。



●編集後記

本年度は、当財団の行事の理事会、評議員会、選考委員会、贈呈式など対面で行うことができました。理事の皆様、監事の皆様、評議員の皆様、選考委員の皆様の温かいご支援とご協力によりまして、つつがなく事業の実施を行つてまいりました。あらためまして皆様に感謝を申し上げますとともにお礼を申し上げます。

財団も昨年6月、浦上聖子新理事長のもと新体制のスタートを切りました。

財団のモットーである「食」は「人」に「良」いこと、元気のもとを合言葉に、明るく元気に前向きに職務を全うしていきます。

本年も浦上聖子理事長はじめ役員の皆様のご指導をしっかりと受け止め、謙虚な姿勢で誠実に財団運営に頑張っていく所存です。

(大豆生田 清志、浦上 佳江、戸田 俊一)



〈お問い合わせは下記まで〉

公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団

〒102-8560 東京都千代田区紀尾井町6番3号 ハウス食品グループ本社ビル

電話 : 050-3532-6365 FAX : 03-3264-6188

URL: <http://www.urakamizaidan.or.jp> (お問い合わせはHPのお問い合わせフォームをご利用ください)

